

『境界—プロキノに寄せて』

イム・フンスン、小熊英二、佐藤満夫&山岡強一、ジェームズ・T・ホング & イン・ジュ・チェン
プロキノ(日本プロレタリア映画同盟)

2017年5月13日(土)~5月28日(日) * 土日月のみ開催

キュレーション:アサクサ

共催:「山谷」制作上映委員会 協力:六花出版

アサクサは、1929年から34年にかけて活動した映画制作者集団プロキノのアーカイブと、東アジアの政治史を考察するドキュメンタリー映画のスクリーニング展覧会『境界—プロキノに寄せて』を開催いたします。近現代の歴史的な視点が交錯する本展では、プロキノのニュース映画や機関紙のアーカイブに並んで、国土や国家の記憶をめぐる知られざる地下茎を探索し、歴史的な事実を刻印する4本の現代ドキュメンタリー映画を合わせて上映いたします。シネマティック・リアリズムの手法に則り、スクリーンを人々の迫害と抗議の場に変えるこれらの作品では、階級闘争や国家間の対立など近代政治の課題が、右左の対立構造を超えた今日のポストイデオロギータリ状況に投影されています。英題の「Kino-Pravda(キノプラウダ)」は、20世紀初頭のディジーガ・ヴェトフによる先駆的なニュース映画シリーズの名称で、現実の断片を構築することで、肉眼では想像の及ばない真理を明らかにする「映画の深層」を意味しています。

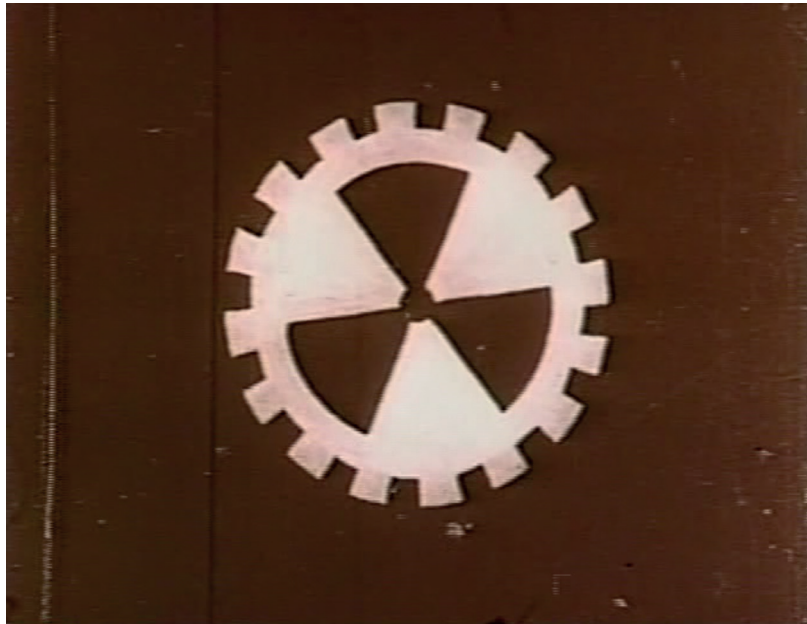
本展の参照点となるのは、大正新興芸術運動と深い関わりをつ映画制作者集団**プロキノ**(日本プロレタリア映画同盟、1929-34年)による活動です。反共主義が深まるなか、京都の社会運動家山本宜治が右翼活動家によって刺殺され、亡命地台湾で自殺した共産党書記長渡辺政之輔の悲報がこれに続きました。プロキノ京都支部が16ミリカメラで撮影した《山宣渡政労農葬》(1929年)は、この二人の指導者に向けられた追悼であり、官憲の厳しい監視のなか京都駅から山本邸へと続く葬列を記録しています。東京プロキノによる《第12回東京メーデー》(1931年)は、芝浦埋立地から始まるパレードが上野公園に向かうまでの様子をとどめており、プロキノが撮影した中では現存する唯一のメーデー映画です。富山県の大沢野村小作争議を記録した《土地》(1931年 監督:高周吉)や東京市電争議の《全線》(1932年 脚本・演出 古川良)では、再現映像や事後的な演出によってセミドキュメンタリーの形態をとり、マルクス主義の理念に基づいた階層の連帯を強調しています。

プロキノのアーカイブに並行して暗室で上映されるのは、近年に制作された4本のドキュメンタリー映画です。**佐藤満夫、山岡強一**による《山谷—やられたらやりかえせ》(1985年)は、労働者の町 山谷での日雇い労働者と、彼らを一元的に管理しようとする暴力団に対する激しい闘いを描きます。山谷の路上に斃れた佐藤監督の殺害シーンに始まる本作は、ドキュメンタリー映画における作者の不在に本質的な問いかけを残しつつ、日本近代化の中で生み出された差別・支配構造を暴き出だしています。**イム・フンスン**による《済州島の祈り人》(2012年)では、1948年の反共鎮圧から6年にわたって、軍や警察、右翼青年団が結託して行った島民虐殺事件(済州島四・三事件)に遡り、夫を失った主人公の沈黙に迫ります。近年のツーリズム開発や海軍基地の建設に揺らぐ島民の心情を描きつつ、組織的に生み出された国家の罪が、一家族の辿った歴史や集団的な記憶のなかに浮かび上がります。

台湾のアメリカの映画制作者デュオ **ジェームズ・T・ホング&イン・ジュ・チェン**による《歴史の血痕》(2010年)は、太平洋戦争時に日本軍が開発・使用した細菌兵器に関する当時の保存資料、映像クリップ、生存者へのインタビューで構成され、ハルビンで行われた人体実験と今日に至る被害者の苦痛を描くことで、日本における歴史の修正主義に抗しています。膨大な証言をもとに知の脱神話をすすめる歴史社会学者**小熊英二**は、福島原発事故の翌年に、20万人以上の人々を集めた反核デモを収録(《首相官邸の前で》2015年)。既存メディアに黙殺された大規模デモを、菅直人元首相を含む8名のインタビューと、インターネットに投稿された動画映像など参加者個々のレンズを通じて多角的に編集し、変革の新たな方法を模索する現代日本の政治運動のあり方を記述しています。

イデオロギーによって特徴づけられた20世紀が終わり、対立構造が支配するラディカルな政治の時代は終焉を迎えたと言われていす。イメージの伝える虚構性に慣れた私たちは、現代のメディアに何を見ているのでしょうか。プロキノの岩崎昶は「すべての芸術はイデオロギーの容器である」と言います。目前を記録するドキュメンタリーという媒体にとって、イデオロギーとは何を意味するのでしょうか。映画はいかにして真実を構成するのでしょうか。イメージの再構築によって、これからの歴史観を作り変えることは可能でしょうか。

本展は、「山谷」制作・上映実行委員会と六花出版社の協力により、アサクサによってキュレーションされています。



上映プログラム

プロキノ京都支部《山宣渡政労農葬》1929年、12分、白黒無音
東京プロキノ《第12回東京メーデー》1931年、7分、白黒無音
プロキノ《土地》1931年、8分、白黒無音
プロキノ《全線》1932年、9分、白黒無音

下記作品は、一日一回の上映となります

12:00～ 佐藤満夫・山岡強一《山谷一やられたらやりかえせ》1985年、110分、16mm カラー・音声、日本語[英語字幕つき]
14:00～ イム・フンスン《濟州島の祈り人》2012年、93分、HDカラー・5.1音声、韓国語[英語・日本語字幕つき]
16:00～ ジェームズ・T・ホング&イン・ジュ・チェン《歴史の血痕》2010年、52分、HDカラー・音声、英語[日本語字幕つき]
17:00～ 小熊英二《首相官邸の前で》2015年、104分、HDカラー・音声、日本語[英語字幕つき]

関連イベント

ポップアップ展覧会『ハリド・アルバー』

5月9日(火)～5月10日(水) 12:00 - 19:00 於アサクサ

『境界ープロキノに寄せて』展に先立ち、来日した政治風刺画家のハリド・アルバーのポップアップ展覧会を開催し、一週間にわたる浅草でのレジデンシーを通して制作された新作を発表いたします。

ハリド・アルバーは、ルーマニア生まれスーダン国籍の政治風刺画家。カタール在住。
漫画を意味するCartoonとスーダンの首都Khartoumをかけた造語「Khartoon!」のアカウント名でソーシャルメディアに風刺画を投稿。また英国ガーディアン紙やアラブの衛星テレビ局アルジャジーラに寄稿多数。
主な個展に、ハーバード大学中東研究所(2016年、マサチューセッツ州)、
全米アラブ系アメリカ人博物館(2015年、ミシガン州)ほか。

アーティスト来日トーク

『アラブの春とソーシャルメディア』

5月11日(木) 20:00 - 21:30 於 Cafe Lavanderia
160-0022 東京都新宿区新宿2-12-9 広洋舎ビル1F
入場無料 ワンドリンクオーダー カンパ製の軽食あり

レクチャー「プロキノとその時代」

5月15日(月) 19:00 - 21:00 於アサクサ
ゲスト講師: 足立元(視覚社会史研究者)

ほか、関連イベントは随時ウェブサイトにて告知。

www.asakusa-o.com

アーティスト:

プロレタリア映画同盟(1929年~1934年)は、映画監督による団体。メーデー、労働組合運動、労働農民党の山本宣治代議士の葬儀を記録した他、アニメーション制作など当時としては先駆的な取り組みが行われた。炭鉱や工場への巡回映画会も取り組まれた。1929年より準機関誌『新興映画』、および1930年『プロレタリア映画』を発刊したが、度重なる発売禁止のために1931年で途絶えた。東京の他、神戸・大阪・京都・高知などにも支部が存在した。元メンバーのなかには、戦後のアニメーション映画や記録映画・教育映画で活躍した者も少なくない。度重なるメンバー拘束により、1934年解散。メンバーに、岩崎昶、厚木たか、井上莞、佐々元十、北川鉄夫、並木晋作、松崎啓次、木村莊十二、能登節雄、篠勝三、山本薩夫、瀬尾光世、田中喜次、山内光(岡田桑三)、上野耕三、今東光 ほか多数。

佐藤満夫(1947年、新潟~1984年、東京)は、映画監督・活動家。上京後、当時の全共闘運動に出会い、69年東大列品館闘争で逮捕される。その後、斉藤龍鳳等の影響を受け、映画界へ。83年「東アジア反日武装戦線・支援連」の集会で「山谷を支援する有志の会」のメンバーと出会い、以後、83~84年まで山谷の闘いに従事。84年11月、本格的に寄せ場の映画を撮るべく「マニフェスト映像」を結成。撮影を開始するも、12月、西戸組・筒井栄一の凶刃に斃れる。享年37。

山岡強一(1940年、北海道~1985年、東京)は、ドキュメンタリー映画監督・労働組合活動家。北海道昭和炭鉱にて育ち、68年上京後、山谷へ。東京日雇労働組合(東日労)に加入。「6・9闘争の会」を経て、82年の日雇全協(全国日雇労働組合協議会)結成の主導的役割を果たす。佐藤満夫虐殺以後、映画製作に邁進。85年映画完成を果たすも、翌月、国粋会金町一家の凶弾に斃れる。享年45。

イム・フンスン(IM Heung-soon、1969、韓国)は、ソウルを拠点とするヴィジュアルアーティスト、映画監督。労働階級の家を描く初期作品から、社会的、国家的な文脈において疎外された人々の生活を描く。イムの政治的かつ情動的な描写は、写真、映像、インスタレーションなど多様なメディアとコミュニケーションへの関与によって成り立つ。2015年第56回ヴェネチアビエンナーレ銀獅子賞を受賞。2016年、ポンピドゥー・センター(パリ);リンカーン・センター(ニューヨーク);2015年テート・モダン(ロンドン)、国立新美術館(東京)、シャルジャ・ビエンナーレ(シャルジャ)、MoMA PS1(ニューヨーク)ほか、展示歴多数。

小熊英二(1962年、東京生まれ)は、1962年東京生まれ。岩波出版社勤務を経て、東京大学現在、慶應義塾大学総合政策学部教授。自著に『単一民族神話の起源』(サントリー学芸賞受賞)、『<民主>と<愛国>』(大仏次郎論壇賞、毎日出版文化賞)、『1968』(角川財団学芸賞)など多数。脱原発運動関係者から映像提供など多くの協力を集め、初の映像作品『首相官邸の前で』(2010年)を完成させた。

ジェームズ・T・ホング(James T. Hong)は、台湾に拠点を置く映画監督・アーティスト。日本軍の細菌兵器、アヘン戦争、人種差別、またハイデガーやスピノザに関する作品を発表。近年では、尖閣諸島(釣魚島)に関するドキュメンタリーが、ベ

ルリン国際映画祭(ベルリン)とグッゲンハイム美術館(ニューヨーク)にて上映される。2016年、第11回台北ビエンナーレ;2017年、世界文化の家(HWK、ベルリン)、ほか多数。

イン・ジュ・チェン(Yin-Ju Chen)は、写真、ドローイング、インスタレーションを主とするアーティスト。ナショナリズム、人種問題、集団的または集合的(無)意識における権力の機能について考察する。2017年、MILL6財団(香港);2016年、リバプール・ビエンナーレ(リバプール)、第66回ベルリン映画祭(ベルリン)、第20回シドニー・ビエンナーレ;2014年、上海ビエンナーレ;2013年、パラサイト(香港);2012年、第11回台北ビエンナーレ(台北);2011年、第40回ロッテルダム国際映画祭、ほか多数。

共催:

「山谷」制作上映委員会

協力:

六花出版

キュレーター:

アサクサは、ギャラリーキュレーターが運営する、40平方メートルの一般住宅を改築したプロジェクト・スペース。美術研究と市場の動向を媒介し、共同キュレーションを推進する。2015年には、倉敷芸術科学大学川上幸之介研究室、ギャラリーエ・タダエス・ロバック、大和日英基金、青山1目黒と共同企画を実施。トマス・ヒルシュホルン、サンティエゴ・シエラ、リクリット・ティラバーニヤ、オノ・ヨーコ、ヨシユア・オコンほか、多数のアーティストと協働。本展は、第9回目の展覧会となる。

展覧会情報:

タイトル:『境界—プロキノに寄せて』

英題:"Kino-Pravda: A Tribute to Prokino"

参加アーティスト:イム・フンスン、小熊英二、佐藤満夫&山岡強一、ジェームズ・T・ホング&イン・ジュ・チェン

プロキノ(日本プロレタリア映画同盟)

会期:2017年5月13日(土)~5月28日(日)

*土日 12:00 - 19:00 のみ開廊

会場:アサクサ

住所:東京都台東区西浅草1-6-16

開廊:土・日曜日のみ回廊 12:00 - 19:00

プレス連絡先:大坂紘一郎

info@asakusa-o.com

090-8346-3232